

他力の信心—親鸞の仏弟子観—（キーワード：他力 真仏弟子 末法 出世本懐）

大谷大学 木越 康

今大会の共同研究テーマである「信仰とは何か—仏弟子ということ—」について親鸞思想の立場から検討しようとする時、『教行信証』『信巻』にある次の言葉がまずは想起される。

真仏弟子と言うは、真の言は偽に對し、仮に對するなり。弟子とは釈迦諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり。この信行に由って、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに、真仏弟子と曰う。

「仏弟子」とは何かを明らかにしようとする時、親鸞はこれを「仮」「偽」と対峙させて「真仏弟子」と言い、「金剛心の行人」、あるいは「この信行に由って必ず大涅槃を超証すべき」者とする。この「金剛心」や「信行」については、同じ「信巻」で「本願力廻向の大信心海なるがゆえに、破壊すべからず。これを「金剛のごとし」と喩うるなり」と言い、また「もしは行もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の廻向成就したもうところにあらざるることあることなし」と述べる。いずれも阿弥陀仏の本願力廻向によって獲得される信心、いわゆる「他力の信心」を意味するものであるが、親鸞はこのような他力の信心を獲得するものを「真仏弟子」とし、それ以外を「仮」もしくは「偽」として位置づけようとするのである。「信巻」には、「仮」「偽」についてさらに次のようにある。

「仮」と言うは、すなわちこれ聖道の諸機、浄土の定散の機なり。

「偽」と言うは、すなわち六十二見、九十五種の邪道これなり。

親鸞には他力の信心を根拠とする仏道以外のすべてを「偽」あるいは「仮」として位置づけようとする態度が顕著であるが、特に諸教が「仮」とされる意味について、『一念多念文意』では次のように述べられる。

諸仏のよよにいでたまうゆえは、弥陀の願力をときて、よろずの衆生をめぐみすくわんとおぼしめすを、本懐とせんとしたまうがゆえに、真実之利とはもうすなり。しかればこれを、諸仏出世の直説ともうすなり。おおよそ八万四千の法門は、みなこれ浄土の方便の善なり。…中略… この要門・仮門より、もろもろの衆生をすすめこしらえて、本願一乗円融無碍真実功德大宝海におしえすすめいれたまうがゆえに、よろずの自力の善業をば方便の門ともうすなり。（『一念多念文意』）

親鸞にとって仏教とは、「よろずの衆生をめぐみすくわんとおぼしめす」ものであり、諸仏出世の本懐もそこにある。そのような仏教観に立つ時、親鸞にとって聖道の諸教や浄土の定散の教えは、すべて阿弥陀仏の本願による救済の道に衆生を勧め入れるための「方便の善」となる。

親鸞はなぜこのような仏教観、さらには仏弟子観に立ったのか。これはもちろん、親鸞独自の体験と思索から導き出されたひとつの態度であるが、今回の発表では、このような親鸞の主張の思想背景を示すことを通して、「信仰とは何か—仏弟子ということ—」に関する仏教諸思想の相互理解を深めていきたい。